

異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



平成20(2008)年、京都大学大学院医学研究科に「医学と社会のつながり」をテーマに掲げる「医学コミュニケーション学」が開講しました。この講座で准教授を務められている岩隈美穂先生は神田外語大学の卒業生です。開学間もない大学に入学し、異文化コミュニケーションという学問や異文研の先生方と出会った岩隈先生は、その後、アメリカの大学へ留学。異文化コミュニケーションと障害学を探究していきます。自分と向き合うことで研究者としての道を拓いてこられた岩隈先生取材しました。

私は千葉市美浜区の真砂で育ちました。神田外語大学のある若葉とは花見川を挟んだ隣町です。高校は幕張総合高校の前身である幕張三校のひとつの幕張東高校に通っていたのですが、病気を患って車椅子での生活を余儀なくされました。袖ヶ浦養護（現・特別支援）学校の高等部に転校し、寮で生活を始めました。

高校生のときから英語が好きで、大学でも学ぼうと思っていたのですが、希望する大学は受験すらできませんでした。当時は車椅子の受験生には、ほとんどの大学が対応していなかったのです。そこで、実家の近くにある神田外語大学の英米語学科に願書を出しました。







昭和63（1988）年の当時、開学したばかりの神田外語大学はまだ、1号館と2号館しかありませんでした。どちらも3階建ての低層建築で、法律的にはエレベーターを設置しなくてもよかったのですが、きちんと備えてありました。ここしかない、と思いましたね。願書も受理され、一般の受験生と一緒に入学試験を受けられました。

でも、第1次募集の入学試験では落ちてしまったんです。そこで第2次募集の試験にも出願しました。英米語学科の募集定員は5名ほどだったと記憶しています。神田外語大学しか選択肢がなかったので、確実に合格できそうな他の学科に変更しようか迷いましたが、一番入りたかった英米語学科を受験しました。

試験が終わると、袖ヶ浦の寮に戻りました。狭き門だったので、浪人することを覚悟していて、合格発表も見に行きませんでした。すると、弟が寮に電話をかけてきて、「番号あったよ」と教えてくれました。実家が近かったので、私の代わりに見に行ってくれたのです。他の大学は一切受けていなかったもので、正直ほっとしましたね。（1/9）



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



時事問題を取り上げる講義を通じて湧いた、  
異文化コミュニケーションへの関心

昭和63（1988）年4月、私は神田外語大学の第2期生として入学しました。学び始めてみると、大学では異文化コミュニケーションの授業が充実していました。久米昭元先生、石井敏先生、荒木晶子先生といった現在も学界で活躍されている方々が講義を担当されていました。高校時代は異文化コミュニケーションについては知りませんでしたが、講義を受けるうちに関心が湧いてきました。

私が大学に入った1980年代の終わりは、日本がバブル景気に浮かれていた時期でした。国内はとても景気がよいけれど、アメリカをはじめ海外では激しいジャパンバッシングが起きている。どうして日本のやり方は海外ではそんなにうまくいかないんだろう、と疑問に思っていました。少し前までは、アメリカのよき弟分のように言われていたのが、急にライバルになり、商売敵のように言われている。それと、湾岸戦争も在学中に起きたので、宗教間の摩擦も極限までいくと戦争になってしまうんだと感じていました。

異文化コミュニケーションの講義では、そういったニュースを題材に取り上げることが多く、外国との関係について考える機会が多かったですね。「時事英語」でも、朝日新聞で記者をしていた方が講師をされていて、授業では新聞記事が教材として使われていました。記事の内容もジャパンバッシングなど時事的なことが多かったように記憶しています。そういった講義を通じて、異文化コミュニケーションへの関心が強くなっていったような気がしますね。





異文化コミュニケーションの講義は20人から30人ほどの少人数制でした。久米先生の講義ではビデオを題材として取り上げることがありました。「青い目、茶色い目」というドキュメンタリーが印象に残っています。目の色の違いという本当に小さな違いが原因でクラスが敵対してしまうという内容です。

帰国子女についてのドラマもありました。海外から帰ってきた男子生徒がクラスにうまく溶け込めずに、いじめの対象になってしまうというものです。とてもリアルなドラマで、見終わったときに久米先生が涙ぐんでいたのを覚えています。久米先生はとても涙もろい先生でしたね。

(2/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



**当たり前に行っているコミュニケーションとは、  
どういうことかをもっと深く知りたかった。**

当時の神田外語大学にはゼミナールがなかったので、私は異文研（異文化コミュニケーション研究所）に入り浸っていました。異文研には本がたくさんありました。読んでみたい本をすべて買うわけにはいかなかったので、異文研の図書を借りられたのはうれしかったですね。研究所には、久米先生をはじめ、教員や研究員の方々がいたので、何か疑問があれば、すぐに質問できました。

異文研には他の大学の研究者が訪ねてきていました。所長である古田暁先生や久米先生に会いに来ていたのです。運がよいと、私もそういった先生方とお会いでき、お話をさせていただきました。古田先生は雲の上の存在でしたね。私は久米先生から多くの指導を受けていたので、久米先生の先生、となるとちょっと恐れ多くて、気軽には話しかけられませんでした。

大学4年生になり、進路を決める時期になりました。私はコミュニケーションを専門的に学びたいと思うようになっていました。私たちが当たり前に行っているコミュニケーションとは、一体どういうことなのかをもっと深く知りたかったのです。でも、当時はコミュニケーション学の修士号や博士号を取れる大学は日本にはなく、先生方に相談すると、アメリカの大学で学ぶことを勧めてくれました。コミュニケーション学をもっと学ぶには海外に行かなくてはならないと考えるようになっていきました。





アメリカに留学することを決め、出願に必要なエッセーの準備を始めました。卒業論文はなかったので、コミュニケーションの授業で書いた英文のエッセーを提出することにしました。当時、異文研で、カンザス大学で留学を終えられた直後の長谷川典子先生にお会いする機会があり、長谷川先生にエッセーの添削をお願いしたことがありました。先生には「これは日本人の思考で書いている文章。エッセーとして成立していない」と厳しく指導していただきました。

両親はアメリカへの留学には反対しませんでした。好きなことをやったほうがいいし、私がこれから生きていくうえで、教育が必要だと思っていたようです。平成4（1992）年に神田外語大学を卒業して、翌年からアメリカのオクラホマ大学に留学し、修士課程で異文化コミュニケーションを専攻しました。（3/9）



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



**障がい者と健常者のコミュニケーション  
他の人は選ばないテーマとの出会い。**

修士課程で学び始めた当初は、ジャパンバッシングなど日本と欧米諸国のミスコミュニケーションについて研究しようと考えていました。同じ研究課程には他にも日本人留学生がいましたが、ほとんどの学生が日本に関連するテーマで研究を進めていました。修士課程もかなり進んだころに、「障がい者と健常者のコミュニケーションも、異文化コミュニケーションのバリエーションのひとつである」という論文に行き当たりました。私は思わず、「それって、研究していいんですか？」って声を上げてしまうほど驚きました。

国対国や、人種対人種ではなく、異なる身体を持つ人間同士の異文化コミュニケーション。これは他の人は選ばないテーマです。「これだったら私も知っている」と思いました。ブレイクスルーでしたね。そのころには博士課程に進むことを決めていたので、自分なりの視点を探していました。コミュニケーション分野での、こういった視点での研究はあまり多くないことも知りました。他人と同じことを研究していても駄目ですからね。それ以来、障害学についても学ぶようになり、障がい者とコミュニケーション、障がい者文化、障害の文化比較などへと研究を広げ、さまざまな論文を書くようになりました。





博士論文のテーマは日本人の中途障がい者についてです。人生の途中で障がい者となった人が、コミュニケーションを通じてどのように適応していくかを研究しました。適応にはいくつか種類があります。身体的適応、社会的適応、そしてコミュニケーションでの適応です。中途障がい者がコミュニケーションを通じて、どのように障がい者という社会的な役割を獲得していくかを観察やインタビューを通じて研究し、論文を執筆しました。

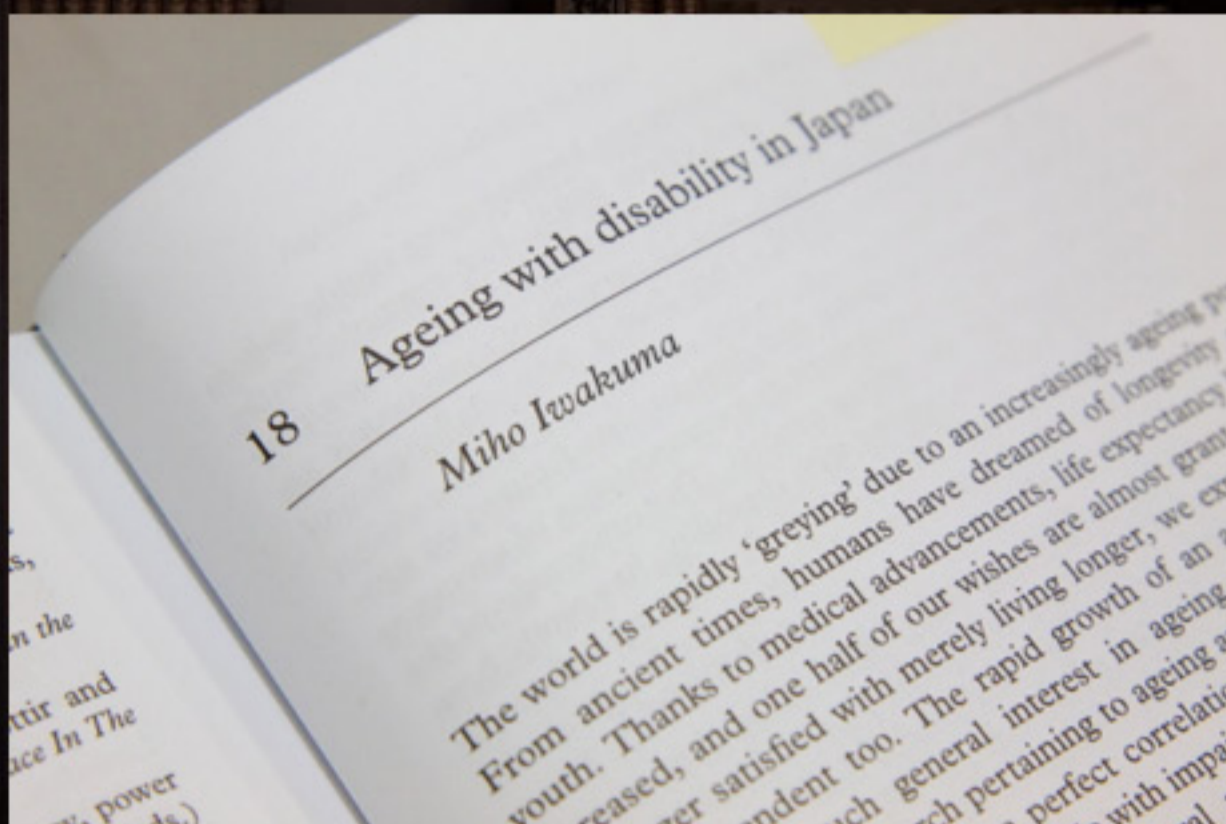
オクラホマ大学に留学していたときも、帰国すると神田外語大学の異文研に遊びに行っていました。実家からも近かったし、研究所に行けば久米先生や研究員の方にお会いできますからね。平成12（2000）年の6月には完成したばかりのミレニアムホールで行われた「異文研キャンパス・レクチャー・シリーズ」にも参加し、遠山淳先生（桃山学院大学教授）の講演を聴き、そのレポートを異文研のニュースレターに寄稿しました。1、2年おきに帰国して大学を訪れるたびに新しい建物ができていくのを見ながら、「また少し大きくなったなあ」と感じていましたね。

(4/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



アメリカとカナダでの教育と研究の日々  
異分野の専門家との共同研究で受けた刺激

平成14（2002）年に博士号を取得した私は、アメリカ東部のペンシルベニア州にあるアーサイナス大学の講師になりました。異文化コミュニケーションと医療分野のヘルスコミュニケーションの講義を担当しましたが、日本語のクラスも教えました。日本人だから日本語を教えられらるうと依頼されて引き受けたのですが、それはとても大変でした。講義を終えて帰宅すると食事も取らずにベッドに倒れ込むような日々。まさに修行のような3年間でしたね。

日本語は日頃何げなく使っていますが、アメリカ人の学生には理論的に説明しなければ教えられません。動詞の活用がこうだから接尾語や接頭語はこうなる、といった規則性をテキストで覚えて学生に説明するのが、「は」や「が」といった助詞に規則性があることも初めて知りました。振り返ってみれば、おもしろい体験でしたね。

平成17（2005）年の1年間は、カリフォルニア大学バークレー校のエド・ロバーツ障害学フェローになりました。奨学金が支給され、自由に研究できる立場です。バークレー校は公民権運動で知られていますが、障がい者運動のメッカでもあるのです。キャンパスには日本では考えられないような重度の障がい者が通っています。私は障がい者の学生たちにインタビューをしながら研究をして、障がい者とセクシャリティーについての論文を書きました。バークレー校のあるサンフランシスコはヒッピーやニューエージの発祥地。すごくリベラルな街で、ヨガやオーガニックなどの文化も盛んです。楽しい1年間でしたね。





バークレーの後は、カナダのアルバータ州です。アルバータ大学のフェローなのですが、カナダ政府が助成金を出して異なる分野の研究者を雇用し、共同で研究を行うプロジェクトに参加しました。テーマは、「障がい者と高齢者のコストと貢献」です。経済学、人口学、作業療法、ソーシャルワーク、そしてコミュニケーションの専門家である私がチームを組んで研究を行いました。

専門分野の違う研究者との仕事は刺激的でした。自分だけで研究をしていると、どうしても文献や資料が偏ってしまいます。でも、他分野の専門家が紹介してくれる文献は私が日頃接しないものですし、それぞれの専門家の仕事も具体的に理解することができました。(5/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



**異文化コミュニケーションと障害学の両方が  
医学コミュニケーション学の土台となった**

カナダはとても住みやすい国で、さまざまな面でアメリカよりも気に入りました。当時のカナダは石油による好景気で、今では考えられないような大量の移民を受け入れていました。この波に乗って、日系カナダ人になろうと思い、必要な書類をそろえ始めたのです。そんなときに、文部科学省のウェブサイトで、京都大学大学院の医学研究科で「医学コミュニケーション学」の講座を開講することになり、准教授を募集していることを知りました。

インターネットで見かけただけの情報で、大学内の様子といった内部情報もなかったのですが、とりあえず応募したんです。すると、京都大学から面接を受けに来てほしいと連絡がありました。半信半疑だったのですが、数日間だけ日本に帰国し、面接を受けました。そして、正式に採用となりました。本当に専門家を探していたんですね。

平成20（2008）年に医学コミュニケーション学講座がスタートし、京都大学での仕事が始まりました。この講座のコンセプトは、「医療と社会をコミュニケーションでつなぐ」というものです。医療の世界では、技術の進歩が急速に進む一方で、一般の人々とのコミュニケーションにおいて大きな隔たりが生じていきました。日本でも1990年代に医療者に対する不信感が募り、「医療崩壊」というキーワードが聞かれるようになりました。そこで期待が高まっていったのが、ヘルスコミュニケーションです。医療従事者や患者を主体とした「対人」のコミュニケーションです。





しかし、医療におけるコミュニケーションの問題は、さまざまな要因が絡み合って生じています。ですから、医学コミュニケーション学の講座では、対人レベルだけではなく、背後にある社会や文化の要因にも関心を寄せながら研究を行っています。講座では障害学も取り上げています。障害の当事者である私が、教員という立場で、医療や福祉を専門とする大学院生に、障害という現象や障害をめぐるコミュニケーションについて語ることの意義は大きいと感じています。

神田外語大学で出会い、オクラホマ大学の修士課程で理解を深めた異文化コミュニケーション。博士課程やその後の研究で探究した障害学。その両方が、医学コミュニケーション学の講座の土台となっています。(6/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



**マニュアルが使えない現場で判断できるように  
医学生はコミュニケーションを学ぶ必要がある**

社会人向けの大学院の講座なので、学生は、看護師や薬剤師、医療ソーシャルワーカー、そして若手の医師などの医療従事者がほとんどです。ですから、医療に関する知識は私よりずっと持っています。しかし、知識に偏りがあって、文系の学生なら知っているようなことも意外と知りません。例えば、「コミュニケーションとは何ですか?」と聞くと、「対面の、言葉を使った1対1のやりとりです」という答えが返ってきます。でも、それだけがコミュニケーションではありません。言葉を使わない非言語のコミュニケーションもあります。ですから、学期の初めには学生の先入観を壊すことから始めています。

年を追うごとに実感するのは、医学部の学生にはもっとコミュニケーションという学問を教えたほうがよいのではないかということです。医学部生たちは、身体や病態生理学に関することはしっかりと学び、もちろん実習では患者さんとの触れ合いなども学びますが、学問としてのコミュニケーション理論はほとんど学ばないまま卒業し、臨床の現場に出ていきます。

医師の国家試験でも模擬患者を相手にして医療面接を行うOSCE（オスキー、客観的臨床能力試験）が導入されていますが、これにはマニュアルのようなものがあります。マニュアルでは、してよいこと、悪いことが明記されていますが、それでは応用が利きません。現場では最終的に自分で判断しなければならないのです。だから、医学生は、コミュニケーションの成り立ちや、それぞれの場面に応じたコミュニケーションの枠組みを学ぶ必要があると思います。





私の講義では、「こういう声かけをしましょう」とか「ジェスチャーはこうしましょう」といった具体的な方法は教えません。コミュニケーションを学問として教えているので、役に立たないことを学んでいると感じる学生がいるのも確かです。でも、コミュニケーションには必ずしも明確な正解があるわけではありません。そこは私にとっても、もどかしい部分ですね。

それでも、私の講義を聴いて、過去に医療現場でうまくいかなかったことが理解できたという学生が何人もいます。学問としてコミュニケーションを学んだことで、自分が体験したことがどういった状況だったかを理解でき、モヤモヤし続けてきたことに名前が付けられて、腑に落ちたというのです。(7/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



**持ちかけられた仕事を積極的に引き受ける  
そうすると、向こう側からドアが開いていく**

医学部の教育では、医療系の出身者がコミュニケーションに専門を広げるケースは増えていますが、コミュニケーションの専門家が教えるケースはまだ多くありません。ですので、私にとっては医学部という組織は異文化であるし、医学部の先生方にとってもそれは同じだと思います。やっていることが、お互いにさっぱり分かりませんからね。

そんな状況で私が心がけているのは、「積極的な受け身」です。京都大学での最初の1、2年はすごく焦っていて、私の方から「こんな研究がやりたい」と言っていました。でも、医療や医学の世界では、信用がないと受け入れてもらえません。個人情報の管理が厳しいので、外部の人間は簡単に受け入れてもらえないのです。心がけたのは、相手から持ちかけられた仕事を積極的に引き受けること。そうすると、向こう側からドアが開いていくんです。とにかく種をまき続けています。そして、芽が出て、機が熟すと収穫する。その繰り返しですね。

異文化コミュニケーションは、医学や建築といった学問のように、病気を治したり、家を建てたりするような目に見える結果の出る学問ではありません。その点でのコンプレックスや拠り所のなさを感じることはあります。東日本大震災後は、福島県川内村での支援にも関わっているのですが、放射能の測定、除染といった直接的な復興支援と比べると、コミュニケーションはすごく無力だと思いました。この学問はあまり役に立たないのではと思うことは今でもあります。







でも、私が医療の世界をはじめ、さまざまな世界に入っていたのは、コミュニケーション学に「水のようなフレキシビリティ」があったからだと思います。誰でもコミュニケーションと言えば、何かイメージが湧きます。誰でも知っていて、コミュニケーションは大切なことだという認識はありますからね。

私は学問とは地図を獲得するようなものと考えています。地図は自分が進みたいと思っている地形の起伏や形状を教えてくれます。いつ終わるか分からない旅のプロセスの予測も立てやすくしてくれます。しかし、地図そのものは目的地もルートも示してくれません。最短距離を目指してもよいし、目を引く景色に出合って回り道をするのも自由です。大切なのは学問という地図、つまりツールを使って、自分自身の研究をデザインすることなのです。(8/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第4回 岩隈美穂 京都大学准教授  
異文化コミュニケーションは自分と向き合う学問



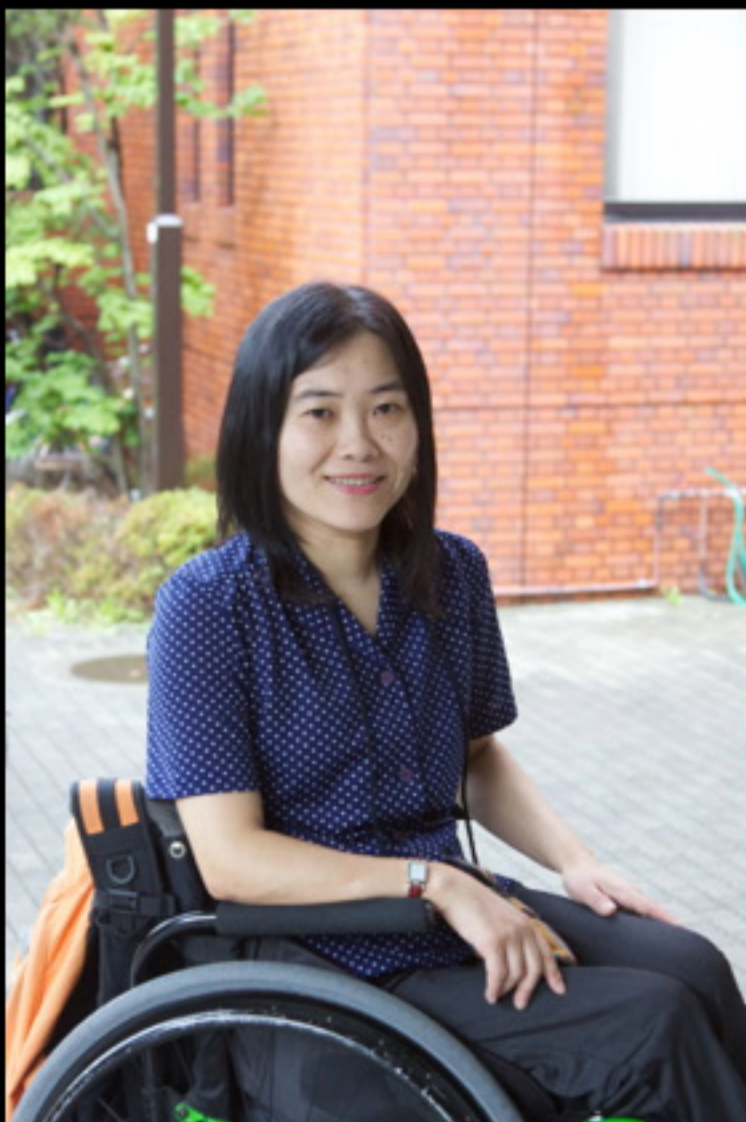
**その場で求められていることに応えていくうちに、  
次の道が拓けていく、と私は思っています**

私は、異文化コミュニケーションを学ぶことは、自分を学ぶことだと思っています。自分が他の人とどう違うのか、それを自分で発見していく学問だと思います。自分が他者とコミュニケーションをしながら、緊張したり、違和感を感じたら、それがどこから来ているのかを自分に問いかけます。過去の経験、あるいはマスメディアの影響によるものかもしれません。他人とのよりよいコミュニケーションは、まず自分をよく知ることから始まるのだと思います。

学生のみなさんには、他人と違うことを恐れないでほしいですね。大学生ぐらいまでは、他人と同じことをやっていないと怖いとか、集団の中にいたいというピアプレッシャーが強い。でも、研究者の道に進んだ私の場合は、人と違うことがよいほうに働きました。それは障害も含めてです。人と違う視点を持っていなければ、研究者としては駄目なんですね。それは研究者だけに限られたことではないでしょう。他人と違うことをぜひ、大切にしてほしいですね。

そして、他人に対してオープンであることです。誰かが自分に仕事を頼んでくれるとき、その人は私には「これができる」と思ってくれています。自分が思ってもみなかったようなことでも、引き受けてみると、「自分にはこんなこともできるんだ」と気づかされます。

他人からの評価に耳を傾け、相手の期待に沿えるようにがんばっていくことです。最近は、やりたい仕事を見つける「自分探し」のようなものが流行っています。でも、その場で求められていることに応えていくうちに、次の道が拓けていく、と私は思っています。(9/9)





**岩隈美穂 (いわくまみほ)**

昭和44 (1969) 年生まれ。平成4 (1992) 年に神田外語大学外国語学部英米語学科を卒業後、アメリカのオクラホマ大学に留学し、異文化コミュニケーションを専攻。博士号を取得した後、アーサイナス大学講師、カリフォルニア大学バークレー校フェロー、アルバータ大学フェローを歴任。平成20 (2008) 年からは京都大学大学院医学研究科の准教授を務め、「医学コミュニケーション学」の講座を担当する。近年は、家具メーカーのデザインプロジェクトに参加するほか、東日本大震災後には福島県川内村で支援と調査を行うなど活動の領域を広げている。